

地球科学輻合ゼミナール

(2008年度 後期 第10回)のご案内

炭酸塩のウラン放射非平衡年代から探る“古気候変動”

渡邊裕美子(理学研究科 地質学鉱物学教室)

講演内容の紹介:

放射線元素の壊変を時計として用いる地球年代学は、時間軸に定量的な制約を与えることができる点で、地球科学の発展に大きな貢献をしてきた。その中でもウラン放射非平衡年代は数年から50万年程度の年代が測定可能で、古気候・水文・地質構造の進化・火山活動のタイムスケールといった多様な事象の「時刻決定」に適用可能である。

本講演では、ウラン放射非平衡年代測定法を概説するとともに、古気候学的研究へ応用した例を2つ示す。最初に、日本海・上越沖のメタン湧出域で採取された炭酸塩ノジュールをウラン放射非平衡分析した結果について報告する。さらに、現在進めている『インドネシアの鍾乳石を用いた古気候学的研究』の現状と展望を紹介する。

12月10日(水) 午後4:30~午後6:00

場所: 理学研究科6号館 201号室